阿波片

安永寅孫

へ13
3362
7

へ13
3362
7

十五
佐賀屋
郁井衛
本

久保猛雄

澁安永重郎作養子

一　同郡
田中左仲ノ本名ニ改ム書類ノ内

一　作兵衛左仲ノ養子
右澁安永重郎ノ本

昭和十八年八月九日
本大學出版部

御安永実録信巻の七

田井庄内中島二反八畝二歩の

義郷の事

作兵衛大左衛門田井庄内浦郷

お願い意義の事

去後小田井庄内中島八

畝の稲田の源まで取り二指反

小人扶持完納仕候

られ候列次本福田寺に於て
歌仙を詠ろうしらハ御太子の御影を
元来三枚那の庄にかゝりて三枚八
御とゆふしめ継中ある〳〵勧進し
られが継の老天龍神〳〵して御ある
浄頂福田寺度同鏡を申くせ度太谷
より頭抱〳〵られし三枚八角の御ハ
さぶめて御術攝津の会なりん

古く行末も御代の筆にかれたる
折くと人合殿に居脚と識くて楽器
物ねてる所にハ引切〳〵楽の丈にを
ゆうくの御術の楽御の誓文まとく〳〵
といふ親く毎暇精もの魂ハ遠鐵を
の攝津の殿にゆう御術の安浄楽御しもを
り御作せまんハ貢〳〵して眞鏡りく三
殿に御ハ元来回弁 九味かしかる三殿

爰に黒沢村の八右衛門といふ者の悴
有けるが武術も游術も知らざりしが
微に草なり男にて剛毅を好みけり
和かに織の武芸者なり継ける縁
て其組中へ入して組の中ですゝみ
常に其組ハ鞭錦鉄砲などの
捕手の役なると兼て役に立つ
らば棒術の一手も知らずしてし

碌にくさもや相撲の風ハ忘られ
ども是一つの心得ありとしめんし
しかせし於ては流石に聞えし深智
の稲田の八右衛門が游泳兼て之等の勝
武芸知るを禁じ組の者ども悪
飯と思ひいかに知らせしれども今度集
し自然と泳ぎを抱くる之役
八ツ時波の元来里院の者ハ申の

大臣大納言の宣旨を成下す
まうぐ〳〵家ふのつる之儀を
組の者共兼置の
八幡宮へ寄進の
みな一切あるべく候
かり初もこれ以八幡宮組中会
法御所ゟ御内
[illegible]

ハ組の者ども初こそ八幡宮
氏御の者人〳〵之儀也
本〳〵のわが子入
初ゟ新宮ゟ
[illegible]
[illegible]
て大臣成給
南殿と更〳〵
忘れ[illegible]

きんかをもてかりて
とるもの百
ゆう時ふ稲田反三段八畝と畑
寄てゆうふ世が世にとかくさん
ゆふ所ふ所のごとく稲ゆう稗ゆう
ゆうて世も末末頃べく物ゆう
世間めてふけるとをるゆう
我方めてく寄ふ民物と物書すべ

世の御物ふ物のうへて物文
書年とゆうく組の者ども物べく
世帯すべくとて文ゆ稲田すまて
世ゆふ物書をゆうてもせりうふ稲
田の世き様異ゆうる者百一反畝の
物の田物ゆうべく府ゆそ前ゆそ物の
組同ゆゆ社立ゆ者をゆすゆ世の源
物ゆうも世ゆ文物の田物ゆすべ

海内異学を所士論と対とべき
時ふへ物と秋方へ新来ひとん意て
一藝とも当るせ藝者と対せ
ふ場合ものき敵対成へしと物を
ふしても面白うみて福田の手策
ふ信仰平く所ふ方ふ初ふ
胸い大ふ敵ひ相せふい源切故
人のはるるふ藝の我ふ新のの如

く当業とは一流のこの流
行ふ行ふて激和のはん張りめく
恐ふふふまる親井ふ拙を
世ふ福田屋精堂織の捕ふめも
あすの行ふ事ふいふ物ふ
芸稽田ふ方へ武術の警ふとるふ
ふふ言まりふる後ふ敵ふ
らくの男のとく雄ふ所ふん

拾て稲田を知せられ渡ふ仰合の
如序と存逆ひ奉る所の事
有根なわれば公儀の
の仕置大名の言の様
ゝ文通して今度安藤の有根
とゝ送りわれの様も大名も
大ひに勢ひ有のわれ
ざる事とゝ思ひ大名の意

法歟形成増長して今度此頃
此方にの仕合知ゝ等と入魂と称
ちゝめ年貢と偽して已う他ゝと
して永く後永とゝ
西尾と云ゝ不勢
異国様知ゝて
と従て諸云ゝ
渡様ふ西尾殿

せて布衾へのこてとき敷るを形如
とんて大ひふ体にして是又被
体と彩せて東敷るハ初りも
ちつん初の場めく屋さきとうる
くたひふ長れて色ちて作り皆く
あ社もせうしが今初のごとく
毒の実ハ用ようハ作
ちつ屋うく
ちつ話と作へ大ひる

鉢ハ初ハ被ハ蓋体ハ作られ
さるよ〳〵ちふ打ちかつき高きを社
して重ちの出被ハと用ひるハ
重ちの作ハ世ハ世ハ世のよ
ハ被も高き事ハ
のてん先ハ安張せう世余ハ被
りかつむ世ハ初ハ桐素材の板の敷
面ハかく〳〵ちせ

祈念ふしては八大龍王もかならず出現有
いかなれきる者之世の中も太寿
のちく往生をとけさせましも
咲小色貌まさる時をこそ有時京
縁へす女もしまの為かくは我
太ひよ力かしこく命こそ物種
かくしいく徳大悲をしりさんと
思ふも命ありてこそ有死し

ては大慈の色も深かれずまのかり
すゞみん国仏して白きて思ひ出
相手をしけ女ゞやせ此ゟ姿此
の本もありし白もて名そるゞ
し御しは菩薩の本ね書は殿
病気の本く討しも重きはたいよ
案内を遣はしぬ宮ゐのへは仕蔵
大臣つ笑ふ小入て根も近寺蔵

り君の御のごとくこの家に有四方へ
とゝへども君の御影恋しく思ひ出
ひとりも高く海ともものと思ひ
世〳〵に三郎仕るもの
ぞきさんと無念とうらまれて行
とてこそ辛労仕る
背の高ふとりたる
惜〳〵腰小袖しゆ
運命ぞうらめ無残世
世へ出ん道てゝと清水
ひらめの弟長次郎
小ひつず高〳〵高
態とせきらんでとりわけ
大ひら剃ひ御
世〳〵しく十年
辛労して病ひ

菩提のため何事も今有々の福禄
としもよきも去ぬめでたくせ
禄万宝御りうしも命にかゝる宝なり
とくより君へたいぎくも命の内りと
して世のなかすいもせしに本なれ
ことに身と大切に思ひまく
子孫もとみ今家繁栄のたねもんなり
くれ々々しと御身を大切とねへ

ことに利剣也へ太平の栄をかゝみ
たのしんでゐしとゆるかに寒暑して以忘と有
ても猶よき忘れがたし能くを権現
跡の栄を楽しく時節と老への
子孫にいひかへしゝ以前へゆへとして
退出しけり猶々悉く繁昌以なん
将の為とて御厚恩を一くに大繁昌
の徳を以わが権現様の事なれ也へし

けんぶつ検使大石主殿助
おとうと大石小藤太
此の事と数云して今更隠れ
なしもつてのほか祝着
なんぞ
存寄云の方うつ検使等とし
打ちつれの事四郎方
のれ先に検使役の大石
しうり見合押て高尾数
馬ふ屋一枚り敷さうべき不ふ
の四郎方へ検使事
きもも作者大石主
至極ふ大石主い高尾
殿のもとにおりと
もかうこと高尾
かうしも陳ず

総の始ふくかうふかまふしく節ハ一明の
中ハすでうくひろう吉槻ふ作蔵森谷
あつハ以縁麻の分知以等との換地
とおちとめて年貢ハと儀しておも
ろ使あみせんしさ分し系累とさ以て
兵儀と遂ハ清よの以是しかとゑ
またてに十五日瞑然せんやしきる金
老尾教ゐのかとふ之ゑり以と探へて

ま以えもゆう于す太ひふ遂成し
けるが金に貴ぶ換地の義ハ忽嘉ゑと葉
ひるき事姿打ふ此乃継ふ皆く太居
事雑風ふ以乃し身のごとく風俗
て時の中ハすと神ひろり從すふ彼罪
在様が女房お勝ハ貞女の合とまり
いまくみどりの髪と切て尼法に
なて降ゐあ所ゟ御織纏衍紙代

おぼえてまの頼を尋ねあ[illegible]
[illegible]をと思ひ[illegible]
[illegible]と祈り[illegible]
ぞいさきうし 祝子ふ[illegible]
大事法照の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]流の[illegible]
[illegible]が[illegible]

[illegible]花見の[illegible]
深て[illegible]小[illegible]
[illegible]
小[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

の恋にわが身に帰する縁組は有まし
として安達が原の仲人として淵に
夫婦と成りぬる言の葉に一度と後
せはしも契りも心の中の定
菓子のたぐひに若の思ひしおもひ夫
行は跡に消てあらぬ成りぬれど
今朝の嫁子も切れて逢ふ事にられて
昼ありしに今我か衛の

大前と引張の池濡に懸花て
倅もありける文の義理とお遠く
下し並れしは懸る想の中の庵
ひかりありかぐ見れ忘れおろかな
夫の敵討もの陪しも思はれず
弟は貞女の心をと立てみとりのうへ
と押切とも夫の墓所に筆で我姿
のの知る墓に夫の敵と倅か斯し一倅

宮本師流しもかゝて来りしこそ流ハ
元流師大望とりへ丈の意趣とともに
ん追付か宮参あて草葉のかけて
待の也しく深く哲めて親丈と
粋宮本節といきめていろく世も哂れ
ハ十七才男の節あり妹ハ武士の妻
生れ父の跡と知しかんハ何くへ次
それよりも女の身れハ沙中あり

かし父の後とりたるへし次第かりも
何かも稲田度しもしつひ海術鍛錬
とんとんして追付か宮をし
親の首と父の墓所へ手向へし秋も
女かれとも武士の妻いて縁きもを
とり履きし流る調ふ宮本節こいへさ
さ継母への胸の私存小山も
四井たれし世まて知られるもの